

磐田原台地における地形発達

鈴木香織

磐田原台地は東海地方を代表する洪積台地であり、典型的な隆起扇状地である。本研究ではボーリングデータの解析、露頭調査、航空写真判読などをもとに、台地上に多数分布する谷の形成過程を解明しながら磐田原台地の地形発達史を考察した。

台地は主に磐田原礫層と呼ばれる洪積層で構成されている。この礫層はその特徴から古天竜川の扇状地性堆積物と考えられる。地表には、細粒の氾濫堆積物が堆積している。台地には谷が多く刻まれているが、南部の大きな谷底の表層地質は泥炭、もしくは有機物を多量に含むシルト層で、その下部は貝殻を含む粘土層であり、ほとんどが海成層であった。これらの谷は、規模の違いはあるものの、次の理由から古天竜川流路の名残であると判断した。

- ①谷の規模に比べて今之浦川の流域面積が小さい。
- ②谷中に今之浦川の堆積物がほとんど見られない。
- ③谷の分布が天竜川扇状地の網状流路と似ている。
- ④台地の西北端の段丘崖で谷が切断されており、谷頭が台地上にないものがある。

などが挙げられる。

本研究では、谷の形成過程を軸に、磐田原台地の地形発達史を次のように考えた。

1. 12~13万年前の間氷期：古天竜川の運搬堆積作用が活発化し、磐田原礫層が厚く堆積した。当時の礫層表面の凹凸が現在の谷の原型となっ

た。

2. 間氷期から氷期への移行期：台地面は離水し、天竜川流路は西方へ移動し、磐田地方に直接流れ込まなくなった。ただし、時折の洪水時にはフラッドロームが堆積した。
 3. 約11万年前から約2万年前のヴェルム氷期：海水準が低下し、古天竜川や太田川は深い谷を刻む。磐田原台地は下刻作用をあまり受けず、以前の谷地形が継続された。
 4. 後氷期の初期：海水準が上昇し、再び河川による埋積が始まる。しかし、今之浦川の谷底にはこの時期の堆積物はほとんどない。
 5. 縄文海進時：海水準がさらに上昇し、より粒径の小さい粘土・シルト層が谷を埋めていく。今之浦川の谷底にも貝殻を含まない有機質粘土層が堆積した。6,000年前の最大海進期には天竜川・太田川・今之浦川すべてに海域が浸入して入り江を形成し、海成層が厚く堆積した。
 6. 最大海進期以降：3,000年前頃はやや海水準が低下し、入江の埋め立てが活発になる。今之浦川や太田川は埋積が遅れ、内湾状態が続き、粘土・シルト層が継続してさらに堆積した。
- なお、残された問題は、磐田地方の地盤運動との関係が明確にできなかったことと、台地の中、北部のデータが少なく、谷の発達過程に不明点を残したことである。